様式第７号(第８条関係)

令和８年 ２月 19 日

三鷹市議会議長　様

議員行政視察に係る結果報告書

会派名　三鷹市議会 自民クラブ　　代表者名　加藤　こうじ

１視察年月日	令和８年２月９日(月)　～　令和８年２月11日(水) (　２泊３日　)
２視察者氏名	伊藤　俊明　　土屋　けんいち　　加藤　こうじ 池田　有也　　吉田　まさとし　　太田　みつこ 吉野　けんさく 計　７人
３視察先及び視察項目	(1) 長崎県　諫早市
	ア) 「乳児・妊産婦専用避難所」について
	(2) 長崎県　長与町
	ア)「健康ポイント事業（ミックンチケット)」について
	(3) 佐賀県　武雄市
	ア) 「武雄市こども図書館」について
４視察結果等	別紙のとおり

＊ 参考　２月 11 日、公益財団法人佐世保観光コンベンション協会（長崎県佐世保市）



三鷹市議会 自民クラブ
会派視察報告書①

【1:日程】令和８年２月９日(月)

【2:視察地及び視察項目】長崎県　諫早市
(1)「乳児・妊産婦専用避難所」について

【3:視察報告】
＜市の概要＞
諫早市は長崎県のほぼ中央部に位置し、東は有明海、西は大村湾、南は橘湾と三方が海に面し、北は多良岳の秀峰を仰ぎ、4本の国道とJR、島原鉄道が交わる交通の要衝となっている。地質は大別すると堆積岩類と火山岩類の二つに分けられ、市の中央部を流れる本明川は、市街地を通って有明海に注ぎ、下流の諫早平野は県下最大の穀倉地を形成している。肥沃な丘陵地帯は野菜やみかんの特産地である。
現在の諫早市は、平成17年3月1日に1市5町（諫早市、西彼杵郡多良見町、北高来郡森山町、同郡飯盛町、同郡高来町及び同郡小長井町）が合併して誕生。市章も諫早市（いさはやし）の「い」の文字をモチーフに、「元気に響き合う市民」、「調和する自然と歴史」、「限りない未来への飛躍」を、躍動感と安定感のある支え合う六つ（1市5町）の輪で新市のイメージを表現している。諫早市の人口は、令和7年12月1日時点で13万417人で、長崎県内で長崎市、佐世保市に次ぐ3番目の規模を持つ都市でもある。

＜「乳児・妊産婦専用避難所」について＞

1. 目的
災害時の避難所運営にあたり、授乳や乳児の泣き声をめぐり「一般の避難所には行きづらい」妊産婦などが安心して避難できる環境を整備する目的から諫早市では乳児・妊産婦専用避難所を「高齢者等避難」にあたる避難レベル3で設置している。

2. 背景
諫早市では令和2年7月の豪雨や同年9月の台風10号の際に大雨警報が発表され、市の対応として避難勧告を発令。その際に幼い子供を抱える市民から授乳や乳児の泣き声を巡り「一般の避難所には行きづらい」といった声が多く、専用避難所を求める意見が寄せられたことから、令和3年8月に公立の諫早中央保育所を乳児・妊産婦専用避難所として開設することを決定した。

3. 取組の概要

① 避難レベル 3 で専用避難所を開設

・対象はおおむね 1 歳 3 か月までの乳幼児と妊産婦、きょうだい児も受け入れる。付き添いは原則大人ひとりまでとし、避難にあたっては事前連絡制を採用。

② 乳幼児受け入れ態勢の整備

・ 専用避難所が開設される諫早中央保育所には乳児室などの設備が整備されており、開設時は市の保育士もしくは保健師(1 名以上)を含む市職員を運営スタッフとして配備し直営する。75 名まで収容可能。

・専用避難所運営にあたってのカギの取り扱いやゾーニングなどの運用マニュアルを策定するとともに、ローテーションを組んで運営するための班体制を組織している。

③ 乳児・妊産婦専用備蓄品の整備

・液体ミルク(240ml)192 缶、ベビーフード(14 食入り)64 袋、紙おむつ 936 個など、最大 3 日分の備蓄品を配備。

4. まとめ

今回、長崎県　諫早市において実施されている「乳児・妊産婦専用避難所」の取組について視察を行った。諫早市では、災害時に特に配慮を要する乳児や妊産婦が、一般避難所とは分離された環境で安心して過ごすことができるよう、保育所施設を活用した専用避難所を開設している。対象はおおむね 1 歳 3 か月までの乳幼児と妊産婦であり、保健師や保育士を含む市職員が運営にあたる体制が整えられていた。

視察を通じて強く感じたのは、専用避難所の利用実績の多寡よりも、「いざという時に選択肢が用意されていること」を重視している点である。乳児や妊産婦を抱える家庭にとって、一般避難所での生活は心身ともに大きな負担となる。専用避難所の存在そのものが、平時からの安心感につながっていることを、現場を見て改めて実感した。

また、開設から運営、閉鎖に至るまでのマニュアルが非常に具体的に整備されており、受付対応や鍵の管理、職員間の連絡方法など、災害時の混乱を最小限に抑える工夫が随所に見られた。加えて、避難所可視化システムの民間アプリ「VACAN」(長崎県と株式会社バカンが災害協定を締結)を活用した混雑状況の可視化など、避難者に必要な情報を分かりやすく発信する取組も印象的であった。

これまでの実績としては、対象世帯の多くが自家用車で避難する傾向があり、専用避難所の利用は必ずしも多くない状況であるとの説明があったものの、「利用されなかったから不要」とするのではなく、「必要な人が確実に使える仕組みを残す」という考え方のもとで制度を維持している点に、行政としての姿勢と責任を感じた。

今回の視察を通じ、乳児・妊産婦など特に配慮を要する避難者への対応は、防災施策と子育て支援施策の双方の視点から一体的に考える必要があると感じた。本市においても、新たな施設整備に限らず、既存施設の活用や専用スペースの確保、運営マニュアルの整備など、段階的に取り組むことは可能であると考える。今回得られた知見を、今後の本市の防災対策および子育て支援施策の充実に活かしていきたい。

三鷹市議会 自民クラブ
会派視察報告書②

【1:日程】令和8年2月10日(火)

【2:視察地及び視察項目】長崎県 長与町
(1) 「健康ポイント事業（ミックンチケット)」について

【3:視察報告】
＜町の概要＞
長与町は、長崎市の中心部から約10kmの位置にあり、北東は琴ノ尾岳(451.4m) を含む、300～400mの山岳地を境に諫早市、西は崎野ノ鼻から南に延びる50～150mの小丘陵で時津町と接し、さらに南は150～400mの山々で長崎市と接している。明治22年4月に町村制が施行され、9郷からなる長与村が誕生。当時約5,000人であった人口は、昭和44年1月の町制施行の時点で、人口13,504人の町となった。
都市化とともに、町の人口が急増し、昭和45年当時と比較すると、昭和55年で2.1倍、平成2年で2.4倍、平成12年で2.9倍、平成22年で3倍を示したが、近年では少子高齢化の進行に伴い、長く続いた人口の増加も減少に転じている。現在の人口は、2026年1月時点で39,210人。近年は微減傾向にあるが、長崎市のベッドタウンとして機能しており、町を挙げて「幸福度日本一のまち」を目指している。

＜「健康ポイント事業（ミックンチケット)」について＞

1.目的
長与町では「幸福度日本一のまちをつくる」との目標を掲げており、健康ポイント事業もその一環として重点的に取り組まれている。
また、各種イベント等を通じた健康ポイント事業は町民が楽しみながら健康づくりを目指すと同時に、将来的に伸びが予想されている医療費の抑制も目的とされている。

2.背景
長与町では現在の町長が平成24年の就任以来「幸福度日本一のまちをつくる」との目標を掲げており、健康ポイント事業もその一環として重点的に取り組まれてきた。令和4年には長崎県立大学との連携事業としてこれまでのポイント事業の効果検証が行われ、参加者の健康意識向上による医療費抑制効果を確認。結果から65歳以上はポイントの獲得が健康行動を促し、体組成結果の改善につながったことが示されたことから、65歳未満を重点取組み対象とした経緯がある。
重点取組み対象のなかでも子育て世代の参加が低い状況を改善するために行われたのが親子を対象とした健康イベントで、なかでもユニークな取り組みとして、薬剤師会と連携した「キッズ薬剤師体験」や医師会と連携した「僕も私もお医者さんに変身」といった体験型のイベントがある。親子がこれらのイベントに参加することにより、参加する保護者の健康ポイントがたまると同時に、健康への意識が高まることが期待されている。

3. 取組の概要

①歩数やイベント参加による健康ポイント付与

・長崎県公式アプリ「歩こーで！」をポイント、チケット獲得ツールとして活用し、「歩くこと」「体組成測定」「健診受診」「健康づくりイベントへの参加」など健康づくりに関する取り組みに対してインセンティブを贈呈。

・長与町健康づくり強化期間を定め、遊びの要素を取り入れた町内周遊型のウォーキングイベント及び体験型の健康づくりイベントの開催。

・市内 9 つの事業者と健康づくり連携協定を推進し、町主催の健康づくりイベントを開催。

②大学と連携した事業効果の検証

・長崎県立大学との大学連携事業として健康ポイント事業の効果検証を実施。

③親子向け健康ポイント事業

・子育て世帯をターゲットに子供向けの「お医者さん体験」や「薬剤師さん体験」等を実施し、参加した子供の保護者が健康意識を高めるきっかけづくりを行っている。

4. まとめ

長与町では健康寿命の延伸と医療費抑制を目的に、健康ポイント事業(ミックンチケット)として、長崎県が進める健康づくりアプリである「歩こーで！」を、ポイント・チケット獲得ツールとして活用し、「歩くこと」「体組成測定」「検診受診」「健康づくりイベントへの参加」など、住民が楽しみながら健康づくりに取り組む仕組みを構築している。また、ゼンリンが行うＳＴＬＯＣＡＬ、スタンプラリーアプリで実施するイベント参加者にミックンチケットを付与するなど、そのインセンティブ設計や、民学産公連携の具体的なスキームは三鷹市における今後の健康増進施策の参考となった。

住民がアプリをダウンロードし、日々の歩数や健診受診に応じて「ミックンチケット」が付与される。付与され、貯まったポイントは、町内の加盟店で１ポイント１円として利用可能であり、健康増進が直接的に地域消費に繋がる仕組みとなっている。結果、高齢者層だけでなく子育て世代の利用も多く、町全体の健康意識の底上げに寄与している。

また、商業施設内に設置された健康拠点については、買い物ついでに立ち寄れる利便性を活かし、体組成計での測定や専門スタッフによる健康相談を実施し、町、地元企業、長崎県立大学などが連携し、データ分析やイベント運営を行っている点が特徴的であった。

三鷹市としても、「楽しみ」を軸にしたインセンティブ設計、単なる「健康管理」では関心が薄い層も参加したいと思えるミックンチケットのような「地域で使える、得をする」という実益をセットにすることで、参加のハードルを下げる健康づくり施策が必要と考える。長与町の取り組みは健康寿命の向上、延伸に努めるとともに、アプリを通じて得られる歩数データ等を大学と連携して分析し、施策の効果を定量的に検証する体制を検討するなど、三鷹市における民学産公連携の協働のまちづくり進めるためにも、大変参考になる取り組みであった。

三鷹市議会 自民クラブ
会派視察報告書③

【1:日程】令和8年2月10日(火)

【2:視察地及び視察項目】佐賀県 武雄市
(1) 「武雄市こども図書館」について

【3:視察報告】
＜市の概要＞
佐賀県の西部にある人口約47,000 人の温泉都市で、平成18 年3 月1 日に旧武雄市・山内町・北方町の1 市2 町が合併し誕生した。大部分が山地で山林面積は約50%を占め、佐賀県内を横断する松浦川と六角川の源流を持ち、武雄盆地内を武雄川・高橋川などの小流が六角川に注いでいる。市の中心部には、舟の形をしたシンボル的な山「御船山」、西部には谷を挟んで向きあう雌岩・雄岩がシンボルの「21 世紀に残したい日本の自然百選」にも選ばれた「黒髪山」、樹齢3000 年を越えると言われる3 本の大楠があり、雄大な山々と豊かな自然に囲まれている。また、1300 年の歴史を誇る温泉郷、420 年以上の歴史を誇る陶芸の里、そして巨木の里としても広く知られている。

＜「武雄市こども図書館」について＞

1. 目的
武雄で子育てしたいと思ってもらえる図書館を目指す目的で平成29 年に「武雄市こども図書館」を開設。読書だけでなく遊び場としての機能を持たせた子育て応援施設として、一日中楽しめるような環境づくりに取り組んでいる。
また、武雄の自然、遊び、出会い、絵本を通じた「学びの場」として、世代を超えた交流、学習できる施設を目指している。

2. 背景
武雄市の図書館行政はかねてから来館者数の伸び悩みと利用者の固定化が課題となっており、指定管理制度の導入以前にも講座やイベントの実施のほか開館日を増やすなどの取り組みを行ってきたものの、効果は乏しかった。
こうした状況を打開するため、平成25 年に指定管理者制度を導入し、民間のノウハウを生かした新しい運営形態でリニューアルオープンした。図書館内に書店やカフェを設置する等の手法は当時全国的にも珍しく、来館者数もリニューアル以前に比べ3 倍以上に急増した。しかしながら、新たな手法にも飽きが生じてくると来館者数が徐々に減少した為、再度、来館者数を増やすために平成29 年に武雄市図書館に隣接して新たに開館したのが「武雄市こども図書館」である。同館では親子向けのイベントや講座を充実させていくことで現在も開館当初の来館者数を保ったまま人気の施設として運営が続けられている。

3. 取組の概要

①子育て応援施設としての機能

・館内に「絵本の山」や子どもたちが好きなテーマを集めた「ひみつの部屋」、「しばふ広場」、「キッズガーデン」など子供を中心に多世代が交流できる様々な空間を整備。

・あかちゃんが眠くなったときお休みできる畳のお部屋のほか、離乳食などの持ち込みの食事が可能なフードコートも設置。

②本館と連携した幅広い世代向けのイベントと居場所づくり

・館内に中学生や高校生向けのグループ学習スペースを配置しているほか、ビジネス用のワークスペース、談話スペースや個別の学習スペースも整備。

・子供たちが図書館に行きたくなるようなキャラクターショーやパンケーキ教室、バリスタ講座など体験型ワークショップをはじめとするシーズンイベントを実施。

・子ども司書講座のほか中高生向けや60歳以上を対象とした世代別の司書講座も実施。

・ネイティブによるレベル別の語学レッスンや、母親向けの美容系や趣味などのライフスタイル提案イベントも実施。

4. まとめ

武雄市こども図書館は「こどもと家庭の生活を豊かにする図書館＝『家（いえ）』のような図書館」、“遊び”から“学び”をコンセプトに全力でこどもの成長をサポートする施設として平成２９年１０月に開設。館内はこどもたちが自由な活動が出来る場所となっていて、ワクワクするようなたくさんの仕掛けがあり、遊びの図書館としてこどもの好奇心を育む仕切りのないオープン空間のフロア設計になっている。２階部分にはフードコートとカフェテラスもあり世代を超えて交流・学習できる施設となっている。子どもへの取り組みに力を入れている事として、相談窓口の設置、お話会、遊び・学びの体験講座、その他様々なイベントを取り入れ来場者の増加に繋げていることを学んだ。

隣接する武雄市図書館は、先行して平成２５年にリニューアルされ「市民の生活をより豊かにする図書館」をコンセプトに、指定管理者制度を導入して、「新しいスタイルの図書館づくり」に取り組んだということだ。①いつでも利用できる図書館：年中無休、開館時間午前９時から午後９時まで。②居心地の良い図書館：利用者アンケートで多かった雑誌の導入、飲み物の自由な持ち込みの意見を取り入れ、図書館内に民間企業が営業する書店・カフェなどの施設を併設。１階ではＢＧＭを流し自由な空間づくり。③体験できる図書館：講座・ワークショップなど多種多様なイベント（年間1000回以上）を開催。このような取組みにより市外、海外からも多くの利用者が集まり、同館の目的の一つである武雄市の知名度向上、図書館の価値向上、利用者数増を図っているという事で参考になった。この取り組みは武雄市こども図書館も併せて取り組んでいる。

利用者が満足のいく施設づくり、この視察において新しいスタイルの図書館づくりを学ばせて頂き、指定管理者制度の導入や民間企業、他機関との連携が市民サービスにつながる、それは行政側ではなく利用する市民が判断することを強く感じ、その仕組みづくりの必要性が重要であると感じた。